



降り注ぐ笑いが
僕の宝物だった
この先
ジジババたちは
どこへ行くのだろう

パッタや草木そして人間たち、すべての生き物に導く
ダムに沈んだ徳山村15年のドキュメンタリー映画

水になった村

監督・撮影
大西暢夫

「じよさん食い過ぎやで!」「山で食べると何でもおいしいの。わはは」
五合の炊き込みごはんを一気に平らげたのは、
80代のじよさんと20代の僕だった。
15年の間東京から通い、ジジババたちと、よく食べよく笑った。
ここは僕の宝物だった。ジジババが山を去る日、僕も徳山に別れを告げた。
この場所を繰り返し伝えることが村の記憶につながってゆくのだろう。

一九六八年生まれ、徳山村と同じ揖保郡の池田町育ち。徳山村をはじめ、日本中のダム計画のある土地で暮らす人たちの姿を追いつづけている写真家。著書に「徳山村 連のおばあちゃん」(第8回日本絵本賞受賞)、「僕の村の宝物」など。現在、ジジババの暮らしに影響され、埼玉の自宅近くで畑を耕している。



「ここには
わしらを見守ってくれる
神様がおるんじや」

一九五七年、岐阜県徳山村にダム建設の話が広まった。日本最大のダムだ。当時徳山村の住民は、約千六百人。みな次々に近隣の街につくられた移転地へと引っ越していった。それでも、何家族かの老人たちが、村が流れてしまいうまでできる限り暮らし続けた。いと、街から戻って来た。同じ揖保郡で育った写真家の大西暢夫が徳山を訪ね、彼らに出会ったのは今から十五年前のことだ。



監督はばあちゃんの待ちに待った訪問者。いや恋人だったのかもしれない。十数年通ったその馴染みと信頼が、この映画を深い深いものにしている。
森まゆみ (作家)

水が覆うことで、それまで見えていたものが見えなくなる。見えなくなるのに、その変化の表情をやさしいと感じる。不思議だ。まるで水そのもののように、映画が、私達を慰撫してくるようだ。
小栗康平 (映画監督)

お腹の減る映画でした。
大西さん食べてばっかり!

名取弘文 (元小学校教諭)

大切なものと、笑いにあふれた徳山村のジジババの暮らし。生きるってことは、なんて愉快で、遅しくて、神々しいんだろう。ナニモノもとって代わることの出来ない豊かさが、そこにはあって、忘れるわけにはいきません -
中嶋朋子 (女優)



陽の当たるアスファルトの村道にひたひたと水が浸みってくる。小さな黒いバツが突然の水でチョコチョコと逃げ出す。また水が迫ってくる。そしてまた水が…。撮影も大詰めになってきたころ、大西暢夫が撮ってきた映像を観てばくはこれでこの映画は完成したと思った。どうして人間だけが大地の時の流れを振り切って走り出してしまったのだろう。あのバツをはじめ、ほかの生きものたちはみんな知っていた。あつて。
企画・製作 本橋成一 (「ナージャの村」「アレクセイと泉」監督)



戦後 80 年 真庭市立図書館連続講座【「食べる」から考える、豊かさとは?】第3回 上映&監督トーク

10月25日(土) 13:00~16:00
湯原図書館 (湯原ふれあいセンターホール)

お話: **大西暢夫さん** (写真家・『水になった村』監督)

申込方法: 中央図書館 (0867-44-2012)、湯原図書館 (0867-62-2014) へ来館、電話、申込みフォームで↑

大西監督をお迎えし、「豊かさとは何か」をあらためて考えます。



写真展も
同時開催!

